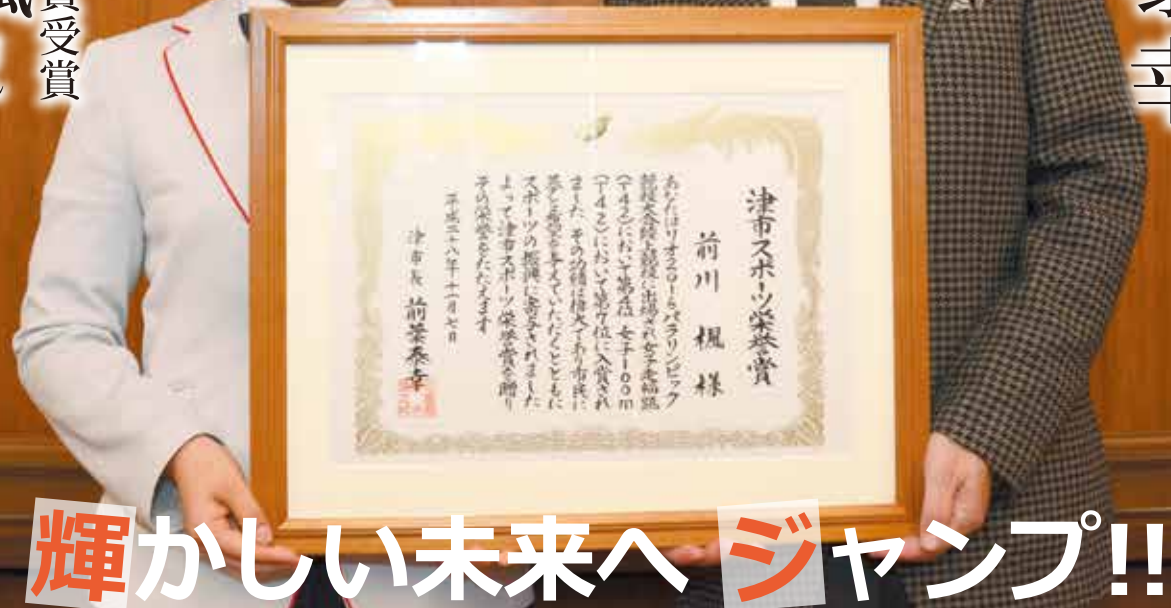


津市スポーツ栄誉賞受賞
前川 楓 さん

津市長
前葉泰幸



平成28年11月7日、津市スポーツ栄誉賞を受賞された前川楓さんをお迎えし、リオ2016パラリンピック競技大会のエピソードや、陸上競技に懸ける思いを前葉泰幸市長が伺いました。

撮影場所／市本庁舎

市長 津市出身の前川楓さんはリオ2016パラリンピック競技大会の陸上競技女子走り幅跳び(T42)で4位入賞、女子100m(T42)で7位入賞という素晴らしい成績を収められました。津市はこの活躍をたたえ津市スポーツ栄誉賞を前川さんにお贈りしました。

最初にパラリンピックの話から伺いたと思います。走り幅跳びの方ですが、1回目がファール、2回目が2m89と、あまり数字が出ていなかった中で3回目はひょっとすると決勝に進めないかもしれないというプレッシャーがあったのではないのでしょうか。どんな気持ちで臨まれましたか。

前川 3本目は絶対に跳んでやる、跳ばないと日本の友達や家族に合わせる顔がないと思って、頑張りました。

市長 強い気持ちが見事にいい跳躍となって3m50が出ましたね。それまでの自己ベストは何mですか。

前川 3m34です。

市長 ここ一発というところで勝負強さを発揮されたんですね。それから4回目にさらにいいジャンプが出ました。

前川 3m68ですね。決勝に残れた安心感で4本目は気持ち良く跳べました。

市長 これは日本新記録であり、アジア新記録でもあるんですね。初出場で4位入賞という成績はいかがですか。

前川 もう少し攻めていこうかと思いましたが、5本目はファール、6本目は数字が出ませんでした。それでも最高に楽しくて、すごくいい経験をさせていただきました。

市長 その走り幅跳びの1週間ほど後の100m(T42)の予選は自己ベストの17秒05でしたね。

前川 予選は決勝と同じ日だったのですが、全力でいきました。

市長 決勝は17秒39で7位入賞でしたが、予選と決勝の雰囲気は違いましたか。

前川 「決勝に残らなければ」という気持ちもあって予選の方が緊張しましたが、予選も決勝も、すごく楽しく走ることができました。17秒05という記録にも満足しています。16秒台を出したかった思いもありますが、あの舞台で自己ベストを出せて本当によかったです。

市長 パラリンピックで世界の強豪と競い合うというのは素晴らしい経験でしたね。

前川 ハイレベルな世界の選手たちと一緒に走れる機会はありがたいことで、本当に楽しかったです。

市長 伝わってくるものはありましたか。

前川 海外の選手は義足の使い方やアップの方法が私たちと違い、良い研究材料にさせていただきました。

市長 観客の雰囲気はいかがでしたか。

前川 走り幅跳びの日は土曜日だったこともあり満席で「ジャポン、ジャポン」というコールが起きました。

市長 自分の気持ちも盛り上がりますね。

前川 日本だと観客が身内と友達くらいしかなくて本当に少ないんです。大勢の観客の中でできるというのは、本当に幸せでした。

市長 パラリンピックならではの雰囲気だったわけですね。

さて、走り幅跳びも100mも、もう一人の日本人選手である大西瞳選手とともに決勝に進んで、一緒に入賞されました。先輩でありライバルでもありますね。

前川 大西選手がいたから陸上を始めたようなもので、瞳さんの背中をずっと追い掛けてきました。その大好きな先輩と今こうして競い合っていることは、私にとってとても大きな意味があります。

市長 年齢は2倍くらい離れていますが、尊敬する先輩なんですね。



前川 姉のような存在で、大好きです。

市長 さて、前川さんは中学3年生の時に交通事故に遭われたそうですが、お辛いと思いますけれども事故当時の様子をお話いただけますか。

前川 私はバスケットボールを5年間やっていて、中学3年生の夏の総体の1週間前に交通事故に遭いました。愛犬の散歩中に歩道を歩いていて、車道を挟んだ向かいの駐車場から突進してきた車と壁の間に挟まれてしまいました。

市長 バスケットボールに打ち込まれていた当時、障がいを持つようになるとは全く想像だにしていなかった

わけですね。義足になってからもスポーツをしたいという気持ちはあったのですか。

前川 事故に遭った瞬間からもう一回みんなとバスケットボールがしたいと思いましたが、陸上競技をする気は全くありませんでした。最初は車いすバスケットボールをやりようかと考えていました。

市長 車いすバスケットボールについては、津市職員の前田浩司が前川さんをお誘いしたと伺っています。前田は三重県障がい者スポーツ協会の会長ですが、車いすバスケットボールのコーチをしています。車いすバスケットボールを検討され、最終的に陸上競技を選ばれるまでにどのような経緯があったのですか。

— KAEDE MAEGAWA —

津市スポーツ栄誉賞受賞 前川 楓さん

平成10年2月24日、津市生まれ。育生小学校、橋南中学校、津東高校を経て愛知医療学院短期大学入学。リオ2016パラリンピックに出場し、女子走り幅跳び(T42) 4位入賞 3m68 アジア新記録樹立、女子100m(T42) 7位入賞 17秒05。チームKAITEKI所属。





前川 車いすバスケットボールの見学に行ったりもしましたが、同じ世代の女の子がいませんでした。女子のチームは愛知県にしかまだないとお聞きし、迷っていたときに大西選手から陸上競技に誘っていただきました。

市長 陸上競技では当然、義足で走ったり跳んだりするわけですが、そこには健常者からは想像できないような難しさもあるんでしょうね。

前川 走れるようになるまで、半年ぐらいかかりました。

市長 半年もですか。

前川 普段使用する義足と、競技用の義足では感覚が全く違うので、体重の掛け方やタイミングの取り方がかなり難しくて。慣れないと分からないことがたくさんありました。

市長 トレーニングはやはり専門のところでいい、一緒に練習するチームもあるんですね。

前川 大和鉄脚走行会というチームなのですが、みんなが陸上をしに来ているわけではなく、義足になったけど、走り方が分からないとか、義足の友達が欲しいとか、そういった理由で来ている人もたくさんいました。小さな子どもから80過ぎのおじいさんまでいろいろな年代の人が、義足を装着して楽しく走ったり、サッカーをしたりして義足に慣れ、義足の面白さを共有するといったチームです。陸上を始めるようになってからは、その練習だけでは物

足りないということもあり、チームの一部の人たちと一緒に毎日練習するようになりました。

市長 前川さんは義足と非常にうまく付き合っているように見えます。「あえて見せていく」そういう心境になったきっかけはなんでしょうか。

前川 義足になった当初は、本当に痛みがひどく、そういうことを考える余裕はありませんでした。痛みが引いてから、これから義足とどう向き合っていけばいいのか、大西選手や大和鉄脚走行会の皆さんに相談したところ、「できないことなんかないよ」と皆さんから教えていただきました。実際、誰かができることは自分もできるんだと思えるようになりました。今はスノーボードなどにも行きますし、好きな旅行にも出掛けますし、義足になってからの方が、移動距離が長くなった気がします。

市長 なるほど。義足は疲れないということですか。

前川 たくさん歩くと痛くなるときもありますが、



健常者が長く歩いたときに足の裏が痛くなるのと同じ感覚です。

市長 自分の体と義足が一体化しているようですね。障がいというよりも、そういう状況があるがままに受け入れておられる、素晴らしい精神的な強さをお持ちですね。スポーツにしても障がい者のスポーツを特別のものと見るのか、それとも普通のスポーツとして捉えるのかだと思います。

パラリンピックで伸びやかに体を動かし、きらめく姿を見せてくださった前川さんですが、私、実は津市スポーツ栄誉賞の表彰式で、前川さんのことを「前川選手は津市の障がい者スポーツの大きな1ページを開いた。しかもそのページは明るく輝かしいものだ」とご紹介しました。というのも、障がい者スポーツをどんなふうに見ればよいのか、少なくとも過去において多くの方が迷っていたと思うんですよね。例えば、大変だとか、あの障がいをどう乗り越えていくのだろうか、そういう特別なまなざし

で見えてしまうことがあったかもしれません。パラリンピックは、同じ条件を持ったアスリート同士の競い合

い、つまりスポーツの祭典ですよ。福祉の祭典というよりも、スポーツの祭典なのだからオリンピックと同じようにスポーツを楽しむ感覚で楽しめばいい。もちろん、スポーツする側も自然な形でスポーツしようという気持ちに至るまで、いろいろな過程があったと思いますが、障がい者スポーツの見方そのものが変わりつつあると思いました。

前川 本当に見たまま感じていただければいいかと思います。義足や耳が聞こえないのに走るとか、目が見えないのに全力ダッシュするとか、



福祉ではなくスポーツ 見たまま感じて欲しい

車いすで疾走するとか、見ているだけで本当に格好良い、そう思っただけなら、私たちにとって一番うれしいことです。スポーツとして楽しんでもいただけるのも本当に喜ばしいことです。ハンディを負いながらもということではなくて、ハンディを「めっちゃ格好良くない？」という感じで見てもらえるとうごく幸せですね。

市長 津市は平成33年に国体を迎え、同じ年に全国障害者スポーツ大会も迎えます。行政組織の中では障がい者スポーツ大会は、福祉の部局が担当することが多いのですが、私たちはどちらの大会も最初からスポーツの舞台として整えて、熱い戦いを繰り広げていただきたいと考え、平成28年4月に国体・障害者スポーツ大会準備室を設置しました。健常者も障がい者も同じようにアスリートとしてのチャレンジを見せていただきたい。

前川 本当にうれしいことです。福祉という捉え方ではなくて、スポーツの一つとして、全国の皆さんに見ていただきたいです。

市長 前川選手のこれからの目標、夢、2020東京パラリンピックに懸ける思いをお聞かせください。

前川 リオでは自己ベストでも4位・7位という結果に終わったので、東京では自己ベストを出して、メダルも取りたいと思っています。

市長 2020東京パラリンピックで前川選手の勇躍される姿を大いに期待しています。津市民、全力で応援してまいります。

市長対談は津市ホームページ・市長の部屋の市長対談でもご覧いただけます。

[HP 津市 市長対談](#)

検索